

平成29年産 コメ通信

第6号（平成29年7月6日）

【発行】

北秋田地域振興局農林部農業振興普及課
（電話0186-62-1835）

生育回復傾向！適正管理を

1 生育状況と気象経過

【生育状況】

- 7月5日現在の管内水稻定点調査ほの生育は、草丈は短く、茎数と葉数はやや少なく、葉色は濃くなっています。
- 前回の調査に比べ、茎数と葉色は、回復傾向にあります。

【気象経過】

- 6月後半の気温は、平年並みに推移し、日気温差が大きくなりましたが、7月の日気温差は小さくなっています。
- 日照時間は、6月下旬に平年より多くなりましたが、7月に入り少なくなっています。
- 降水量は、7月1半旬にまとまった降雨があり、平年より多くなっています。

表1 定点調査結果(7月5日 9地点あきたこまち)

	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉数 (葉)	葉色
本年	46.0	576	10.0	44.1
平年	51.9	621	10.1	42.5
前年	52.5	532	10.2	40.4
平年比較	89%	93%	-0.1	104%
前年比較	88%	108%	-0.2	109%

※平年は過去10カ年の平均値

※葉色はSPAD-502で測定した値

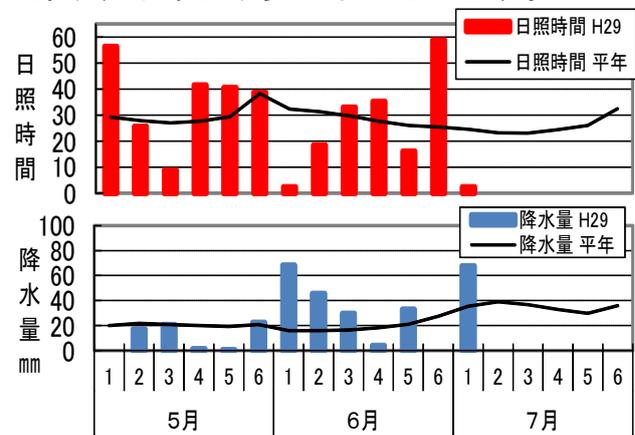
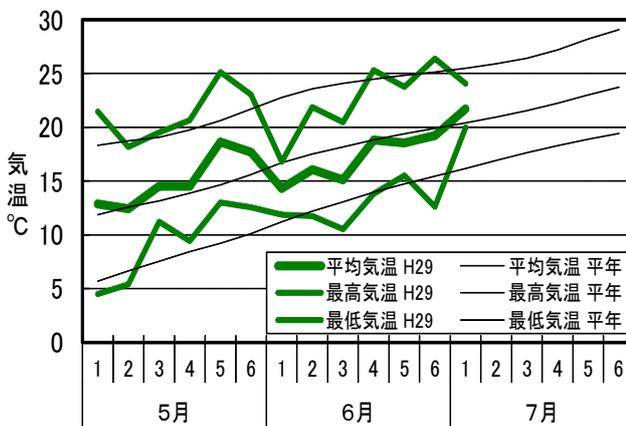


図1 気象経過図（アメダス鷹巣）

2 中干し後の水管理

- 中干し後は、根の活力を維持するため、急激な湛水管理は避けて間断灌水を行います。幼穂形成期に土壤水分が不足すると1穂着粒数が減少しますので、中干しは、幼穂形成期までに終えます。
- ただし、カドミウム含有米の発生防止対策地域では、田面が空気に触れないように出穂期の前後各3週間（7月15日頃～8月25日頃）の常時湛水管理を徹底します。
- 気象情報に注意し、冷害の危険のある低温（日平均気温20℃以下、最低気温17℃以下）が予想される場合は、前歴深水管理（幼穂形成期頃～約10日間水深を10cm以上に保つ）を実施します。

3 主要病害虫の防除対策

▼飼料用米も主食用米と同様に、病害虫防除を行ってください▼

【いもち病】

- 北秋田管内では6月22日と7月1日に感染に好適な気象が観測されています。感染した場合は1週間程度で病斑が見られるので、ほ場の見回りにより早期発見に努め、病斑を発見したら直ちに予防剤と治療剤の混合剤（ブラシンまたはノンブラス）を散布してください。

【斑点米カメムシ類】

- 畦畔では、アカスジカスミカメ・アカヒゲホソミドリカスミカメの成虫が確認され、イネ科雑草が出穂しているとすくい取り数が多くなる傾向にあります。
- 出穂の10～15日前まで畦畔や農道等の草刈りを徹底し、斑点米カメムシ類の発生源をなくしましょう。地域でまとまって、一斉に草刈りを行うと効果的です。
- 水田内のホタルイ類等のカヤツリグサ科雑草やノビエの除草を徹底しましょう。

4 あきたこまちの追肥判断

【幼穂形成期の予測】

- 平均気温から算出したあきたこまちの幼穂形成期（幼穂長2mm期）は、平年値による予測並みの7月4半旬と見込まれます（表2）。
- 田植え時期による差があることから、各ほ場を確認し、管理を適期に行ってください。

表2 幼穂形成期の予測（アメダス鷹巣）

田植日	幼穂形成期（平年値）
5月15日	7月15日（7月15日）
5月20日	7月18日（7月17日）
5月25日	7月21日（7月20日）
5月30日	7月25日（7月23日）

※中苗。7月6日以降は平年値で計算。

【栄養診断による追肥の判断】

- 幼穂形成期に栄養診断を行い、下表を参考に追肥を検討してください。
- 幼穂形成期の極端な葉色低下は、1穂着粒数の減少・有効茎歩合の低下を招きます。本年は田植え時期やほ場間で生育のバラツキが大きいことから、適切な判断が必要です。
- 幼穂形成期に葉色が濃く草丈が62cm以上の場合は、倒伏の可能性が高くなるので、穂肥の施用を控えます。

生育型	窒素追肥量(kg/10a)	
	幼穂形成期	減数分裂期
I型	2kg	2kg
II型	2kg	2kg
III型	ムラ直し1kg	2kg
IV型	なし	2kg
V-1型	なし	ムラ直し1kg
V-2型	なし	ムラ直し1kg
VI型	なし	なし

(注)目標収量570kg/10a、あきたこまち

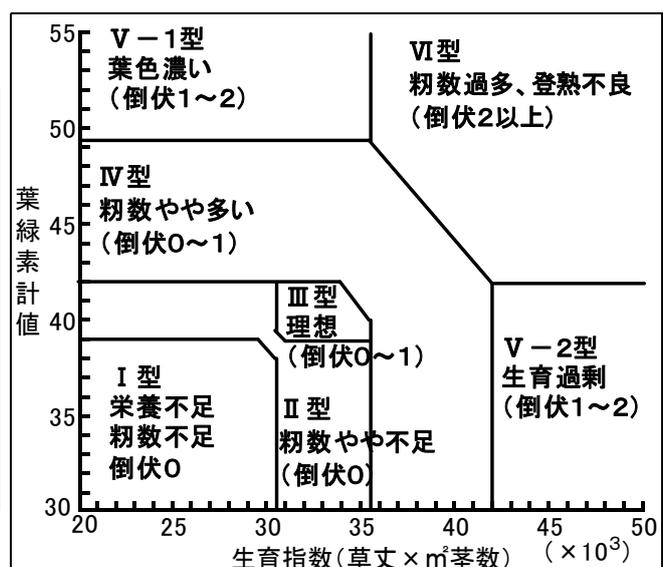


図2 幼穂形成期(7/15頃)における栄養診断(県北)

作業時は、熱中症に気をつけ対策を忘れずに！！

問い合わせはJ A、または農業振興普及課まで

HPは「北秋田 コメ通信」で 検索

～次回発行は7月中旬予定～